



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	森敦『われ逝くものごとく』と「ハーメルンの笛吹き男」
Author(s)	中村, 三春
Citation	層 : 映像と表現, 11, 246-254
Issue Date	2019-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/88034
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73525
Type	departmental bulletin paper
File Information	wareyukumono.pdf



森敦『われ逝くものごとく』と「ハーメルンの笛吹き男」

中村 三春

1 二つの「笛吹き」物語

森敦の長編小説『われ逝くものごとく』（初出『群像』一九八四・三〜一九八七・二、一九八七・五、講談社）のタイトルに採られている「われ逝くものごとく」という言葉は、作中において、その初めは、「西目」と呼ばれ、赤褐^{あか}のセッターとともに海岸の岩窟に住み、少女サキに様々な話を伝えた男の口癖であった。この「西目」は、物語の現在においては既に立ち去った後であり、サキが探し回るものの、その行方は杳として知れない。しかし、次々と関係者が死んでいく、つまり「われ逝くものごとく」（私は死に行く者のように）であるようなこの物語に最初の動因を与えた者として、言い換えればこの物語における不在の中心として、彼はサキや他の人物たちに

よって、事ある毎に話題とされている。

ところで、このような重要人物である「西目」は、サキに「ハーメルンの笛吹きじさまの話」を聞かせたとされる。語り手は「この物語を読まれるほどのひとには、『ハーメルンの笛吹きじさまの話』を、繰り返すまでもないでしょう」と語るが、広く知られている題名は「ハーメルンの笛吹き男」であって、題名が少々違っている。ただし、確かにその話の内容は概ね、童話として知られている「ハーメルンの笛吹き男」と重なっているようである。サキの話によれば、ドイツのハーメルンで鼠の害で困っていた時に、そのじさま（老爺）が現れ、鼠を退治すれば金を出すという約束で笛を吹いて鼠を海に沈めるが、人々は金を出すのを拒む。するとじさまは再び笛を吹き、今度は子供たちがついて行って、それを山が呑み込んでしまうとい

うものである。

由来を尋ねれば、この物語が広く知られるようになったのは、ドイツ古代学を研究し、伝承を収集したヤーコプとヴィルヘルムのグリム兄弟が、一八一六年刊行の『ドイツ伝説集』上巻に、「ハーメルンの子供たち」のタイトルで収録したことによる¹⁾。続いて一八四二年には、イギリスの詩人ロバート・ブラウニングが、「ハーメルンの笛吹き男——子供の時」を発表している²⁾。グリム兄弟の伝説は、「二二八四年のこと、ハーメルンに一人の風変わりな男が姿を現した。この男はさまざまな色が入りまじった布でできた上着を身にまとっていたので、ブンティング（斑^{まだ}ら男）と呼ばれていたという。自分は鼠捕りだと称し、一定の代金をもらえれば町から鼠を退治してやろうと公言した」と始まる³⁾。まだらの服や赤い帽子を着ていたことが明記されており、これはブラウニングの詩が、“The Pied Piper of Hameln” すなわち「ハーメルンのまだらの笛吹き」と題されていることとも繋がる。グリム兄弟の文章は、伝説の要約・解説といった体裁のものであるが、短い割には詳細な物語となっており、年月日や、子供たちの年齢・性別、あるいは戻ってきた子供たちの様子、さらに後代における慣習や儀礼の成立などにも目配りがなされている。

一方、『われ逝くものごとく』の語り手がサキの言葉を代

弁するようにしてまとめたその内容は、ストーリーとしては概ね一致するが、幾つかの点でグリム兄弟のものとは異なっている。すなわち、グリム兄弟では「じさま」ではなく単に「男」であり、鼠は海ではなくヴェーザー河に入り、山が割れて塞がったのではなく山の洞穴に子供たちは呑み込まれ、足が不自由なのではなく上着を取りに戻ったために助かった男の子があつたという違いである。「ひとり足の悪い子がいて、みなに遅れて助かつたというもんだけ」と、『われ逝くものごとく』では説明されている。また、グリム兄弟の笛吹き男は何よりもその異様な相貌が際立っており、最初はまだらの服、二度目は狩人の出で立ちで赤い奇妙な帽子をかぶっているが、小説の方では、「たけが高くて、マントみてえなもの」を着ているとされ、それほど異装というほどではない。

2 『われ逝くものごとく』における「笛吹き」

それでは、いったいなぜ『われ逝くものごとく』では、「ハーメルンの笛吹きじさまの話」がたびたび引き合いに出されるのだろうか。要点は幾つかに互るが、第一に、何よりもサキの dad (父) の出征と戦死にまつわる経緯がある。この小説における物語の根源は、サキの dad が出征し、いつか戻るだろ

うという期待に反して戦死を宣告されたことにある⁴。そこから、この夥しい死の物語は始動するのである。先述のサキによる「ハーメルンの笛吹きじさまの話」は、このだだの出征の見送り行列の際に出たものであった。「ひとり足の悪い子がいて、みなに遅れて助かったというもんだけ」というサキの言葉を読んだ、も聞いていて、自分が頸部脊髓柱狭窄症という障害を負っている⁵と知っているだだは、そのために前線から「返されるのではないかと恐れたのです」と語られる。「足の悪い子」という原点との違いはこのためなのだろう。

しかし、年が移って加茂の雪部隊は北洋の果てで全滅したという噂が流れ、その時にサキの⁶が、は日新丸の親方から、北洋はいつも霧だと聞き、霧の中を出征した⁷だだの運命を、「笛の音につられて山に呑み込まれてしまった」子供たちの物語と重ねる。さらに戦死公報と遺骨（ただの石ころの遺骨）が届くが、死んだと言われた義太郎が復員したこともあり、サキのじさま（祖父）は、だだの死を信じず、埋葬も供養もしようとし⁸ない。注連寺で会った善念大日様はじさまに對して、「ハーメルンの笛吹きじさまの話」をサキが語ったことについて、「それだけで全滅でことだねえか。だだを送ったとき孫が言うたとせば、そのときだだの運命はきまつたみてえなもんだ」と言う。このように、サキのだだの死は、「ハーメルンの笛吹きじさまの話」

の暗示によつて帰結したとする示唆が、繰り返し現れるのである。

また第二に、サキの⁹だだの後に続く多くの死についても、この伝説との関係が付与されていく。まず、サキのじさまは鶴岡の神様（霊媒師）による口寄せで、だだの最初の女であったあねま（遊女）のお玉がだだの後追いをする¹⁰ことを聞かされるが、後追い、つまり死者の後に続いて自らも死に赴く行為は、ハーメルンの子供たちが行列して失踪した有様の反復としてとらえられる。しかも、犬までがそうなのだ。そもそも「西目」は赤褐のセッターとともに暮らしていたのだが、「西目」その人は姿を消しても、赤褐のセッターやそれに似た複数の犬が、サキややつこ（浮浪者）たちの後について歩く。野良犬が行列をなして、人の後について歩くのである。

「サキがお波を見たのは、これがはじめてではありません。はじめて見たときもお波には何匹も犬がついていたのです。そのときはなんの気にもしなかったのに、赤褐のセッターと共に洞窟から立ち去った人『われ逝くものごとく』から聞いた『ハーメルンの笛吹きじさまの話』を思い出しました」とか、「サキは『ハーメルンの笛吹きじさまの話』はほんとにあったのだと思い、箸で空缶を叩く音につられて行つたあの犬たちが、ハーメルンのじさまの笛につられて行つたという、子供たちの

ような気がしてきました」と語られている。

だ、あねま、やつこ、これらの重要人物らは、いずれも「ハーメルンの笛吹きじさまの話」の影響圏内にあり、彼らは人知を超えた、耳には聞こえない笛の音によって、ある同一の運命、すなわち死すべき運命の流れに身を任せているようである。こうして、『われ逝くものごとく』における「ハーメルンの笛吹きじさまの話」は、第一にこの物語に最初の動因を与え、第二にその後も物語に動機付けを行う重要な役割を果たしているのである。

3 〈ハーメルンの子供たち〉の歴史

ところで、グリム兄弟が伝えた「ハーメルンの笛吹き男」の伝説について、詳しい検証を加えたのは、ドイツ中世史の泰斗・阿部謹也である。現在でも決して古びていないその内容は、現代までに唱えられてきた諸説を突き合わせ、一次資料を尊重し、初めにあった笛吹き男伝説の原型を推定し、後世そこに付け加えられた要素も考慮に入れ、この伝説の社会的な意味を明らかにしたものである。その論証のプロセスには、ここまでにまとめた『われ逝くものごとく』における「ハーメルンの笛吹きじさまの話」が担う役割に通じる意味、あるいは、

なぜ『われ逝くものごとく』という現代小説が、このおよそ八百年近くも昔の伝説と結びつくのかの理由を解き明かすヒントがあるように思われる。

阿部謹也によれば、この伝説を伝える最古の一次資料は、ハーメルンのマルクト教会の一三〇〇年頃に作られたと覚しきガラス絵で、そこには、「ヨハネとパウロの日（すなわち六月二六日）に、ハーメルン市内で一三〇人の者がカルワリオ山の方（すなわち東方）へ向い、引率者のもとで多くの危険を冒してコッペンまで連れてゆかれ、そこで消え失せた」という碑文が刻まれていた。その他、一三八四年頃にミサ書『パッシオナレ』のタイトルページに書かれたラテン語の詩、さらに一四三〇年から五〇年頃に書かれたらしいリューネブルクの手書本があり、この三点だけが一次資料ということである。それらに共通するのは、一二八四年の六月二六日に一三〇人の子供たちが失踪したという出来事であり、笛吹き男や鼠捕り男といった要素は、どうやら後から付け加えられたらしいということが分かる。阿部は、この子供たちの失踪、笛吹き男、鼠捕り男という要素ごとに、この伝説の成立過程を検証していく。

ドイツの中央部からやや西北にあるハーメルン市は、この地域に布教していたフルダ修道院が、戒律を重んじる寺院である聖ボニファティウス律院を置き、その回りに農園と市場が生ま

れて、十二世紀末までには都市基盤が完成していたとされる。

伝説に記された十三世紀には、遠く離れたフルダ修道院はハーメルン市への影響力が低下し、ハーメルン市はエーフェルシュタイン家が領主のように権力を行使していたが、それをハノーヴァー王国を建設した強大な勢力であるブラウンシュヴァイク＝リューネブルクのヴェルフエン家が狙っていた。そこへフルダ修道院がハーメルン市をミンデン司教区に売却しようとする動きが重なり、これを拒んだエーフェルシュタイン家に対して、一二六〇年、ついにミンデン司教軍は兵を差し向け、市の東部ゼデミューンデで市民軍と激突して、ハーメルン市は壊滅的な敗北を喫するのである。その結果として、ハーメルン市はヴェルフエン家が半分を支配する地域となった。この時に流された夥しい血と、その後の祖国解放戦争の記憶とが結びつき、笛吹男とは市民軍の先頭に立った喇叭手であるとする解釈が、十八世紀から二百年間はハーメルン市の公式の伝説として位置づけられていたということである。阿部は、この説は子供たちの失踪と二十年のずれがあり、またこれは明らかな史実であって、笛吹き男の伝説と結びつく由もないとして否定しているが、ただし、この伝説の起源となった頃のハーメルンがどのような歴史の運命に見舞われていたかは押さえておかなければなるまい。それは、戦争の時代であったのである。

阿部は、研究者ヴォルフガング・ヴァンが挙げた、この伝説の真相に関する二五種類の解釈を挙げ、ヴァン自身やドパーティンの東ドイツ植民説や、ヴォエラー女史の遭難説、それから子供の十字軍説などを詳しく検証している。阿部によれば結局のところどの説も決定的とは言えず、真相を一つに決めることはしていないのだが、これらの根底にあつて共通するのは、中世の下層民が置かれた貧困と劣悪な生活環境である。たとえば、子供の十字軍とは、一二二二年にフランスのオルレアン出身の羊飼いの少年が、キリストのお告げと称して、数千人の少年少女を集め、マルセイユから出航して行方不明となった事件である。ドイツでも同じ年に、ケルンの少年がモーゼを自称して数千人の少年少女を集めてアルプスを越えてジェノヴァに集結、さらにプリンディシに至って司教に説得されて挫折した。その背景には、貧困とペストに代表される苦難の生活と、そのはけ口としての、年に数度も繰り返される狂乱の祝祭や魔女狩りなどの宗教的熱狂があつた。ヴォエラー説とは、この熱狂のうちに一三〇人の子供たちが湿地帯の底なし沼にはまり込んで死んだ、という仮説である。阿部はこれについて、「容易には信じがたい出来事であるにせよ、ヴォエラー説にはかなり真実に近いものがあることは否めない」と評価している⁷。

もちろん、真相究明ではなくその精神的な真実が問題にされ

ており、阿部は、かけがえのない子供の死の痛みを、「後世の人々はそれぞれのおかれていた時代の社会的・心的境位のなかでこの伝説を受けとめ、その内部からの要請に応じてこの伝説を変容させていった」と見ている⁹。またタイトルの笛吹き男は、実は後から付け加えられた要素なのだが、その理由は、楽師・音楽が祭の熱狂には必要不可欠の存在であつたためである。笛吹き男は、社会的な異端者として差別され卑下されながらも、宮廷でも庶民の中でも珍重された遍歴楽師として、この伝説に後から登場したのである。さらに鼠捕り男は、十二世紀以降、繰り返しヨーロッパを襲った飢饉と疫病、特にペストの大流行とそれによる大量死の横行と無関係ではないだろうと阿部は論じていく。当時、鼠の害は飢饉と疫病に直結する深刻な被害を与え、ヨーロッパ諸地域には同様の鼠捕り男の伝説が広く見られた。笛吹き男も一種の魔術師や悪魔として表象されるようになり、鼠捕り男もまた同様の社会的地位にあるものと見なされた結果、十六世紀の半ばにこの二つが転化したと阿部は見ている。

以上、要点のみを見てきたが、阿部は、伝承がいかに民衆社会の現実を反映し、あるいはその要請を受けて作り上げられているのかを明らかにしている。

4 〈戦後文学〉としての『われ逝くものごとく』

ここで、改めて『われ逝くものごとく』の物語内容を見直してみよう。これまで、筆者はこの小説を、交通する空間の問題や、語り手「わたし」の問題などの構造的な契機に着目して論じてきた。その過程で、「ロマンスか、あ、さん」、つまり婚外交渉と私生児の物語も浮かび上がってきたのである。作中では、他所者との間に子が出来た場合、その母が「ロマンスか、あ、さん」、その子が「ロマンス息子」あるいは「ロマンス娘」と呼ばれていた。この小説は、語り手の「わたし」がそのような他所者でありながら、この回路を経て地域のコミュニティに深く入り込んだことが、大きな動因となっている可能性がある¹⁰。さらに、その背景としてこの物語は、日本が戦った先の大戦とその副産物としての未亡人問題、そして戦後の社会の荒廃とそこから復興が重要な基盤となっていることを忘れてはならない。物語は戦中から戦後にその基本的な時間を置いている。従つてこの小説は、一九八〇年代に発表されてはいるものの、内容的には、まさしくいわゆる戦後文学に属するものなのである。この小説にも復員した義太郎の妻が、弟と既に再婚していたために引き起こされる騒動が描かれているが、たとえば大岡昇平の姦通小説『武蔵野夫人』（『群像』一九五〇・一―九）は、

やはり復員者の小説であつた。当時の大岡の小説が戦後文学と呼ばれるのであれば、『われ逝くものごとく』も明らかに戦後文学なのである。サキのだが出征して帰らぬ人となり、それをじ、さ、まが供養せずに死に、あ、ね、まのお玉がだ、だの後追いをし、というように死は繋がっていく。ここで語られているのは、戦争そのものではなく、戦争の結果としての人間と社会の困苦と混乱の様相にはかならない。

サキの暮らす加茂の人々の生活は、漁に出ている日新丸はまだよい方で、稼ぎ頭の夫を失ったサキのが、(母)は魚の行商をして生計を立て、その他の多数に上る登場人物のうちの多くは、あ、ね、ま、か、や、つ、こである。すなわち、この小説の主役を務めたのは、戦後の混乱期における最下層の民衆なのである。鶴岡・酒田のなになに様(豪家)や、いつでも要領よく立ち回って羽振りのよい「上海」などは別格で、サキも彼女のじ、さ、ま、サンドイッチや支那そばが生まれて初めて食べるご馳走であつた。加えて、密教の湯殿山信仰、善法寺と龍神様のお札、鶴岡の神様の口寄せ、さらには『雨月物語』の「浅茅が宿」にも似た本宮のか、か、さ、まの家、またそれにつながる吉祥天と石榴の木の由来など、この地域は戦後になつてもなお前近代的な信仰と呪術的な風土が濃厚に残存する場所である。サキのだ、だが、遠く北洋で戦死したらしいと噂されるように、戦争は遠くで行わ

れ、この地域そのものは直接の戦災を受けてはいないが、そのことは裏返せば、ここが戦略的に標的となるような大都市も軍需施設もない、貧しく、遅れた、いわば近代化から取り残された地域であるからである。すなわち、中世のハーメルンと同様に、『われ逝くものごとく』は、その住民が困苦と宗教的な因縁に絡め取られた地域の物語であつたのである。

『われ逝くものごとく』は長大な時間の流れを持つ物語でもあつて、結末近くになると、農地改革が終わつて自作農が増え、モンペ姿はほとんど見られなくなり、や、つ、こは施設に入れられたという状況が語られる。一九七六年一〇月に起こった酒田大火にも触れられていることから、この小説は戦中からおよそ三十年以上に亙る時間的なスケールを持つていることが分かる。しかし、最後の時点でサキはいまだに結婚してい、いず、サキのが、が、か、つてのお葉にも似て、狂気に近づいていくように描かれている。阿部謹也が論証した「ハーメルンの笛吹き男」のように、数世紀にも及ぶ伝承と発展の歴史には及ばないが、サキとが、がに關しては、だ、だの出征・戦死に始まる戦後の時間は、まさしく笛吹き男に連れられてだ、だがいなくなったその時から、生涯に亙る苦難の連続であつたのである。このように見ると、「ハーメルンの笛吹き男」の伝説は、単に招集と戦死、あるいは後追いなどの人物の行動の原型となつたのみならず、

『われ逝くものごとく』の時代的・社会的な基盤と響き合うものであったと言っているのではないだろうか。

以上、「ハーメルンの笛吹き男」そのものの起源と増幅過程さらにそれが「ハーメルンの笛吹きさまの話」として『われ逝くものごとく』に取り入れられて響き合い、物語の動因となる様相を見てきた。こうしてみると、物語は決して、現今の高度資本制で言われるように消費されるのではなく、一見消費のように見えるプロセスにおいて増幅され、それどころかそこにおいてこそ真に生産されること、さらにそのような物語の生産は、常に再生産であり、いわゆる第二次テクストを生成する作業なのだということが明らかになる。消費のプロセスで生産されることにおいて、物語は一種の貨幣のようなものとも言える。言い換えれば、物語の受容は、読者の体験が常に一回的なものである点においては個別的なもののだが、一定の時間の流れにおける持続・継承・展開を伴う点においては集団的なものでもある。すなわち、物語の受容体験は、まさしく物語を産出する体験にほかならない。伝承においては無数で無名の人々によって行われるそのような物語の受容＝生産体験を、小説作者は職業として、また技能として意識的にやつてのけるのである。そのような違いはあるものの、物語が受容の場でまた生産もされるという大枠において、前近代と近代とは共通部分が大

きいとも言える。

既に筆者は『われ逝くものごとく』の語りについて、いわば一種の汎人称表現であることを論じたところである。すなわち、語り手の「わたし」だけでなく、だ、が、じさま、ばさま、あねま、やつこなどと呼ばれる人々は、個人でありながら個人を超え、誰しも響き合う世界に合流し、へわれ逝くものごとく」という呼び名あるいは符牒は、「私は死する者のように」という共通属性をもつて人から人へと転移する。森敦の言っていた「汎通する自己」である¹⁰。今や、この汎人称表現は、テクストの枠を超え、物語を受容する行為と場にも及ぶものと言っていることができる。そしてまた、森敦が「月山」や『われ逝くものごとく』において、現代の経済発展からどう見ても取り残されたときか思われない山形・庄内の地とその住人たちをなぜ執拗に描き続けたのか、その問いに対する回答もここに現れているのではないか。

近代小説はその発展の帰趨として、小説形式の断片化、フラグメント化を推し進め、それはある限界点にまで達した。森敦はそれを横目で眺めつつ、人の生きる世界とその世界の表象としての物語を回復させるべく、小説構造とその内容において、物語の受容と生産の場の復権を目指したのではないだろうか。ここに、位相幾何学や光学などの現代科学と、密教曼荼羅や論

語などの基層哲学との希有な合一という、森敦特有の小説構造論と死生観とが現れたのである。「ハーメルンの笛吹き男」を切り口として読む『われ逝くものごとく』は、私たちにそのことを教えてくれるものと思われる。

注

- 1 「245 ハーメルンの子供たち」(グリム兄弟『ドイツ伝説集』上巻、桜沢正勝・鍛冶哲郎訳、一九八七・四、人文書院。Die Kinder zu Hameln, Brüder Grimm, Deutsche Sagen, 1816)
- 2 ロバート・ブラウニング「ハーメルンの笛吹き男——子供の詩」(Robert Browning, *The Pied Piper of Hameln-A Child Story*, 1842。富士川義之編『対訳 ブラウニング詩集』、二〇〇五・一二、岩波文庫)
- 3 「ハーメルンの子供たち」(前掲)、二八三ページ。
- 4 『われ逝くものごとく』の構造と物語の詳細については、中村三春「『ジャンル』と『構造』の旅——「月山」と森敦のテクスト様式——」(『花のフラクタル 20世紀日本前衛小説研究』、二〇一二・二、翰林書房)、および『わたし』とは誰か——『われ逝くものごとく』の『構造』——(同)参照。
- 5 阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男——伝説とその世界』、一九七四・一〇、平凡社、一九八八・一二、ちくま文庫。同書は一九七四年に

刊行されてこの伝説の研究としては基本文献となり、ちくま文庫に一九八八年に入ってから二〇一六年までに文庫版で三十二刷を数えている。

6 同、二九ページ。

7 同、一七四ページ。

8 同、一七五ページ。

9 詳細は中村三春「方法としての『わたし』——森敦『われ逝くものごとく』における語りの位相——」(『北海道大学文学研究科紀要』152、二〇一七・七) 参照。

10 「汎通する自己」は、森敦「吹雪からのたより」「ノートB」(一九五七年一月〜一九六一年五月、『森敦全集』1、一九九四・四、筑摩書房)に登場する言葉である。詳細は中村三春「方法としての『わたし』」(前掲) 参照。

「付記」本稿は二〇一七年二月九日、國學院大學において開催された第二回森敦研究会における『われ逝くものごとく』と『ハーメルンの笛吹きさまの話』と題する口頭発表を基にしている。